

登別市の観光政策に
グループ提言された
優秀作品の紹介

最優秀賞

同志社大学政策学部

真山ゼミ



登別といえば『温泉』のイメージだけ、ほかに何があるのだろうかという印象でこの登別を訪れました。実際に来てみたら、温泉街と駅や市役所周辺は離れていて、温泉はあくまでも観光資源の一つ。温泉イコールまちではありませんでした。観光に携わっている方以外の市民意識の中に、温泉はどういうふう

ているのか疑問を感じました。

市の計画の中にも、『来訪者と交流をはぐくむまちづくり』『市民と観光客の両方が満足できるまちづくり』が強調されていますが、実際にはできていないように思われます。

観光政策の実施に当たって、超えなければならぬものが、温泉・観光という市民の意識形成です。市民全員が、登別『温泉』すごいんだよ。それだけじゃないんだよ。そういう意識が大切なんだと思います。

登別市は、室蘭市にある大企業のベッドタウンの機能もあります。そんな中で、市民と観光をどうやって結び付けていくのか。どうやって組織を活性化させていくのか。これからのまちづくりに重要な課題になってきます。

そこで、協働観光推進プロジェクト『おもてなしとシステムの構築』を提言します。

これは市民活動団体に『観光によるまちづくり』をコンセプトに活動していただくものです。そのためには、まず行政がそういう活動を行っている方やそういう発想を持っている方を、講師に招いて講演会を開催し、意識啓発を図る必要があると思います。

登別を一番理解していないのは登別市民かもしれない。初めは行政が中心となって活動する組織をつくり、活動が落ち着いた時点で、NPOや

民間が中心になって活動することで、地域の自立や発展につながると思います。

これを実行し、観光とまちを一体化させることで、新たな顧客や長期滞在者が増えると思込られます。

市内で活動している団体はたくさんあると思いますが、いずれは廃れることが予想されるので、今のうちに少し手を添えて、登別は『温泉』だけじゃなく、まち全体が温かいといった活動が必要だと思います。

優秀賞

立教大学コミュニティ

福祉学部 原田ゼミ

(3年専門演習)



集客を旅行会社に頼っているため、地域での経営力不足、自発的な取り組みが弱いとの問題点を挙げました。その解決に当たっては、自分たちコミュニティ福祉学部の観点から『観光福祉』というプランを提言しました。



人や観光名所などの『資源』『実行可能なプラン』『きっかけ』の3点を視点に、誰もが気軽に旅行できるサービスの提供を基本に、障がいのある方に対する『サポート』や『入浴サポートヘルプ』、登別の自然の魅力を知っていただく『散策ガイド』や『自然体験』、『交通機関の充実』を、今あるプランにオプションで付け加えることで、選択の自由と価格が安く抑えられると考えました。

また、活動される方に支払う報酬は、地域通貨で支払うことも提案しました。運営スタッフの確保にはワーキングツアアを導入し、お金がなくても登別にきて活動してもらい、登別の温泉に入っていたら、魅力を知っていただく仕組みです。

そのためには、それぞれの活動支援団体の調整役であるマネジャーの養成が必要になります。

地域全体が登別市について考え、行動することが地域福祉の実現に結びつくと思います。